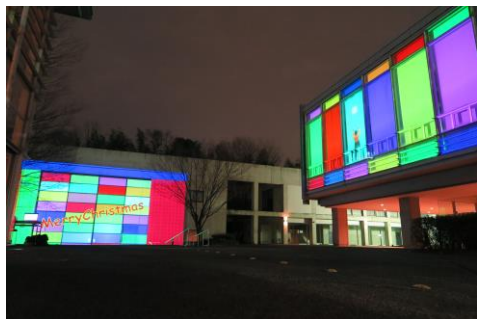


プロジェクションマッピングを公開

12月26日(月)の夜、環境情報学部メディアコミュニケーション専攻の学生による、プロジェクションマッピングの発表会が行われた。これは、同専攻の各セミナーにてメディアを学び、経験した集大成となる卒業制作として制作されたものだ。本学のスタジオの壁面と、情報センター(図書館)の窓面に大きく映し出されたマルチ映像は、音楽と相まって見ごたえのある作品に仕上がった。なお、同専攻の学生達による卒業展は1月13日(金)に行われる。



日永下水処理施設を見学

11月11日(金)、武本行正教授(環境情報学部)と武本ゼミの学生8名が四日市市新正にある日永浄化センターの見学を行った。下水処理施設を訪問することで、日頃からゼミで学んでいる污水处理技術の理解を深めることが目的だ。市の下水処理のうち約50%がここで浄化されていることや、各種処理内容の概要、污水处理方法などの説明を受けた。今年4月に供用開始された最新鋭の第4系統については、ステップ流入式の多段硝化脱窒法を用いて窒素を80%除去し、リン除去が必要な汚水はポリ塩化アルミを注入してリン酸アルミとして除去するとのことで、厳しい放流規制に対応する高度処理施設の稼働が始まっていることを知った。なお、脱水污泥は焼却の後に焼却灰として、太平洋セメント社へ送り、リサイクル原料となるそうだ。その後、第4系統を地下から一周し、最初沈殿池、反応槽、最終沈殿池などを見学。学生達にとっては初めて見る施設で、日頃からの学習の助けとなったようだ。

三滝中学校で認知症サポーター養成講座の劇を上演

平成26年度から四日市市内の川島地区と協創ラボの連携協定を結んでいる四日市大学の松井真理子ゼミ(総合政策学部)が、その一環として、11月10日(木)に、地区内の三滝中学校で行われた「認知症サポーター養成講座」の中で、民生委員さんたちと一緒に、劇を上演した。まず、川島在宅介護支援センターの伊藤センター長に講師となっただき、認知症サポーター養成講座を受講し、全員が「認知症サポーター」となった。続いて、川島地区の特別養護老人ホームや在宅介護支援センターを訪問し、地域における高齢者支援のしくみを学んだり、実際に認知症の方にお会いしたりした。その後、川島地区の民生委員さんたちと一緒に、認知症サポーター養成講座のための寸劇を練習し、三滝中学校で上演を行った。

熊本県益城町での仮設住宅支援研修会に参加

11月4日(金)、鬼頭浩文教授(総合政策学部)とゼミの学生の北村潤さん(4年)・鈴木昂樹さん(2年)の3名で、熊本県で開催されたイベントに参加した。このイベントは、仙台を拠点に復興支援をしている全国コミュニティライフサポートセンター(CLC)が企画し、熊本県内の被災した自治体に呼び掛け、仮設住宅の支援にかかわる行政・社協・NPOなどに集まっただき、宮城県東松島市の行政職員と仮設住宅の自治会長をされた方を招いて勉強会的な要素を持ったものだ。東松島市は四日市東日本大震災支援の会が継続的に支援をしており、三重の我々は、次の災害に備えるという立場で参加し、情報交換をさせていただいた。

これまでのPick Up Topicsは、ホームページでご覧いただけます。
<http://www.yokkaichi-u.ac.jp/examinee/topic.html>

 文部科学省 **地(知)の拠点** Pick Up Topicsには、COC事業における記事が含まれています。

学校法人 暁学園 四日市大学

【発行】入試広報室

〒512-8512 三重県四日市市萱生町1200

TEL:059-365-6711 FAX:059-325-7218

<http://www.yokkaichi-u.ac.jp/>

<http://smile.yokkaichi-u.ac.jp/> (受験生サイト)



P.1・市制施行120周年記念事業企画委員に学生が委託を受ける
・ジョイントセミナーで準グランプリ受賞!
・世界津波の日で開催された四日市市の防災と消防団規律訓練

P.2・今年もサンタ電車を運行
・広報ブランディングセミナーを開催
・ハウストマトの栽培現場を見学

P.3・十四川・鎌谷川・海蔵川および支流の竹谷川を調査
・レジ袋有料化調査報告会に参加
・いなべ市の太平洋セメント社を見学

P.4・プロジェクションマッピングを公開
・日永下水処理施設を見学
・三滝中学校で認知症サポーター養成講座の劇を上演
・熊本県益城町での仮設住宅支援研修会に参加

市制施行120周年記念事業企画委員に学生が委託を受ける

平成29年、四日市市が市制施行120周年を迎えることを記念し、事業の案などを企画検討するための会議「四日市市制施行120周年記念事業企画委員会」が、このほど四日市市によって設置された。11月9日(水)に開かれた第1回の会議では、市長から委嘱状が各委員に手渡され、四日市大学の学生である水谷晴香さん(総合政策学部2年)が、若者代表3人のうちの1人として委員に委嘱された。また、委員の互選で委員長の選出が行われ、学識経験者として委員の委嘱を受けた小林慶太郎教授(総合政策学部)が、委員長に選出された。初回のこの日は、小林教授の進行のもと、事業全体を通じたコンセプトや記念事業のシンボルマークの作成などをめぐって、早速熱い議論が交わされた。若者代表としては唯一の出席者であった水谷さんも、「多くの市民に周知できるようスポーツイベントを活用してはどうか」などの意見を積極的に述べるなど、その役割をしっかりと果たしていた。



ジョイントセミナーで準グランプリ受賞!

12月2日(金)から4日(日)の3日間、今年も「ジョイントセミナー」が開催された。ジョイントセミナーは、地方自治や行政について学んでいる各大学のゼミによる合同の研究発表合宿で、四日市大学の岩崎恭典ゼミ・小林慶太郎ゼミ(総合政策学部)のほか、法政大学・宇都宮大学・中央学院大学・山梨県立大学のゼミが参加し、合計で16本の研究が発表された。このうち、本学の学生たちが発表した「超高齢社会～高齢者にとって暮らしやすい地域とは～」は、準グランプリを獲得することができた(グランプリは、宇都宮大学)。本学からの研究発表が準グランプリを獲得したのは3回目で、残念ながらグランプリを取れなかったものの、自分たちの研究が評価され、準グランプリを獲得することのできたチームの学生たちにとっては、大きな自信につながったようだ。



世界津波の日で開催された四日市市の防災と消防団規律訓練

平成27年12月、国連において11月5日が「世界津波の日」に制定された。そして、初めての「津波の日」となった平成28年11月5日(土)に、四日市市主催の防災訓練が開催され、四日市大学の学生の機能別消防団員10名も参加した。オレンジのビブスを着用し、鉄道・百貨店での地震対策、防災倉庫での給水、非常用トイレ設置などの大規模な訓練となった。学生機能別消防団は、防災に機能を限定した消防団で、平成28年1月に10名が団員となり、11月1日(火)に新たに1年生の団員が加わった。翌日には、消防団の規律訓練が開催され、四日市市内の多くの団員とともに、学生団員が規律訓練に参加した。2日連続の活動であった。



今年もサンタ電車を運行

12月17日(土)、三岐鉄道北勢線東員駅から、今年も「サンタ電車」が運行された。これは、平成22年度に、地域路線の北勢線を支援する目的で、四日市大学総合政策学部の学生達が三岐鉄道へ提案したことから始まり、同学部の「地域志向科目」として三岐鉄道の全面的な協力の下、毎年行われている人気のイベントだ。4両編成の電車のうち、3両の車内をモールやオーナメントでカラフルに飾り付け、クリスマスソングを流しながら走行した。

今年は、よしもとの三重県に住みます芸人「カツラギ」のお二人も参加し、履修学生40名、総合政策学部社会人卒業生8名とともに、子供たちにお菓子をプレゼントした。西桑名駅では、沿線のキャラクター4体がお出迎えとお見送りを担当。東員駅では、県交通政策課のご協力により、松阪市や津市の子どもたちが作ったツリーが改札口に飾られた。

また、広報チラシの裏には、東員町コミュニティバスの無料乗車券をつけ、公共交通機関のさらなる利用を促進するなど、回を追うごとに様々な提案が盛り込まれ、成長するイベントである。乗車客数が推定約1,200人と、今年も大盛況であった。



広報ブランディングセミナーを開催

四日市大学のCOC事業の一環である1人1プロジェクト一般採択事業「地域の和菓子資源を利用した地域ブランドの創生」(主査 東村篤教授、副査 岩崎祐子教授)研究活動成果の地域への還元として、「広報ブランディングセミナー」を開催した。10月22日(土)午前10時から四日市市安島のじばさん三重(公益財団法人三重県北勢地域地場産業振興センター)において、特別招聘講師に栗津重光 元象印まほうびん記念館長(一般社団法人 国際CCO交流研究所理事研究員)をお迎えした。栗津氏は「企業も行政も団体も地域もブランディングは、基本的には一緒、いかにブランドを創り守り育てるかです」と、まず身近な成功事例である、くまモンを皮切りに、何でもサクセスストーリーがあることを印象づけての展開に耳を傾けた90分であった。

四日市大学の学生である、浅井雄大さん(環境情報学部1年)は「私は、名古屋に住んでいるので、大学のある四日市に来るまでは公害があってコンビナートだらけのイメージをずっと持っていました。入学して通学をするようになってからはそのイメージも変わっていきました。今日の栗津氏のお話もブランド構築ってイメージが重要だと強く感じました。会場のじばさん三重の一階にはご当地萬古焼の土鍋が売られていました。祖母の実家のある瀬戸市でも瀬戸焼をブランドとして抱えていて、四日市の土鍋や土鍋を使った物などを、もっと外部に発信しては?と思いました。発信力が弱いように感じます。」との感想を語ってくれた。



ハウストマトの栽培現場を見学

5月より、トマトとトルコギキョウの苗付けからビニールハウスでの栽培、生育管理や調査を行っている廣住豊一講師(環境情報学部)と廣住ゼミの学生が、11月22日(火)に、四日市市の「あずんガーデンファーム」を訪問し、トマトのハウス栽培の現場を見学した。

あずんガーデンファームを運営する株式会社 良菜健土(りょうさいけんど)の加藤秀樹代表取締役から、トマトの栽培方法だけでなく、農業経営や食に対する考え方などについて、お話をお聞きすることができた。

また、12月6日(火)には、廣住講師と学生で四日市大学構内にある実験用ビニールハウスの大掃除をした。床に敷いてあった防草シートをはがして丁寧に洗ってから、きれいに貼り直し、新たな気持ちで新年を迎えることができた。



十四川・鎌谷川・海蔵川および支流の竹谷川を調査

11月18日(金)、19日(土)、22日(火)に武本行正教授(環境情報学部)と武本ゼミの学生らが十四川と鎌谷川、ならびに海蔵川の本支流と上流の竹谷川を調査した。この調査は学内のセミナー調査研究の一環として行われており、富田地区の十四川は5年ほど前から十四川を守る会と共同で調査を行っている。

今回は、内部川の支流で、西山地区を流れる鎌谷川の調査は、西山町自治会の方々と共同で実施した。上流の廃棄物処分場跡地からの浸出水や、茶畑や流域家庭の排水がこれらの水系の汚染を起していることから、本学に共同調査依頼があり、数年来実施されている。海蔵川は4年前から中流と下流で継続調査しており、依頼に基づき昨年度から上流の調査も追加して実施している。上流の菟野町の養豚場や竹谷川上流の県地区の養豚場からの排水が汚染を引き起こしていることから、県(あがた)地区市民センターの矢田館長や竹谷川の蛍と桜を守る会と共同で調査を実施中だ。県地区では高濃度の有機汚濁のため、蛍が減少したり、稲作の稲が被害を受けたりしており、対策が急がれている。なお今年は、被害地域は水稻(昨年は枝豆)を栽培している。やはりコシヒカリを作付した2圃場では倒伏が発生したものの、その他は、キヌヒカリなどの作付のため被害はなかったようだ。



レジ袋有料化調査報告会に参加

10月12日(水)に、神長唯准教授(総合政策学部)と環境情報学部の学生2名が、名古屋市環境学習センター「エコパルなごや」で開かれた「レジ袋有料化に関する社会調査結果報告会」に出席し、四日市大学と名古屋市立大学で実施している共同研究の調査結果が初めて公表された。名古屋市では、2007年10月に緑区を皮切りに、行政と事業者の協定方式によるレジ袋有料化が始まった。2009年4月に名古屋市内全域に展開されたレジ袋有料化施策は、画期的な取り組みとして全国の注目を集めたが、実施9年後の現状を分析するため、今年8月に協定を結んでいる事業者へのアンケート調査を実施した。この調査報告会では、結果報告にとどまらず、事業者、市民、消費者団体、学識経験者などの関係者に学生が加わって、広く話し合う場を設けた。当日は愛知・岐阜・三重の東海圏から大学生が多数参加した。討論結果の取りまとめ役の一人となった環境情報学部4年生の男子学生は、アルバイト先での実体験をもとに、チェーン店では店長の異動が全国区レベルであるため、よい取り組みであっても継続性の難しさがあることなどを指摘した。神長准教授も、自らが委員長をつとめる「三重県ごみゼロプラン推進委員会」での議論や三重県による調査結果などを紹介しつつ専門的見地からコメントした。



いなべ市の太平洋セメント社を見学

11月25日(金)、武本行正教授(環境情報学部)と武本ゼミ学生の2、3、4年生ら9名がいなべ市にある太平洋セメント社を見学した。この施設は、各種セメントの焼成と産業廃棄物の処分を同時に行っており、日本で最大級だ。

はじめに講義室で説明があり、藤原岳より採掘される良質の石灰岩から各種のセメントを作成していることや、セメント1トンあたり190kgのリサイクル原料を使用していること、また石炭燃料とともに50%の比率でリサイクル燃料を用いていることなどを学んだ。産廃や各種廃棄物の有効利用の状況についてや、セメントは1,450℃の高温で焼成するため、ダイオキシン等は排出されないことも知ることができた。その後、施設を回り、セメント焼成ロータリーキルン(回転式の釜)の見学では、下水汚泥、都市ごみ、RDF施設の焼却灰、廃プラ、廃タイヤ、碧南火発からの石炭灰、廃油、廃酸、廃肉骨粉などをトラック1,000台/日で搬入し、キルン内への投入していることや、この処理場では1日6,200トン以上のセメントを焼成し、製品はトラックや三岐鉄道の貨車で四日市港などから出荷しているとの説明を受けた。学生たちは廃棄物処理の現状について、良い勉強になったと感想を述べていた。